バイカルを窓辺で

新辺カコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バイカルを窓辺で

【Ｎコード】
Ｎ８３４８Ｓ

【作者名】
新辺カコ

【あらすじ】
私にはルームメイトがいる。気まぐれで、紅茶の好きなルームメイトが……。

シュンシュン……シュシュシュ……ピー……！

「あ……っちちち……沸きすぎたわ」

慌ててガスを止め、ティーポットに湯を注ぐ。
茶葉がジャンピングを始め、柑橘系の力強く爽やかな香りが部屋中に広がる。

深く、深く、香りを吸い込む。深呼吸するように深く。

肺腑が爽やかな香りで満たされてゆくのが心地良い。あの子もきっと、この感じが好きなのだろう。
この、香りで体が満たされる感覚が。

「これで……この紅茶はお終い。また、別なん買っとくね」

テーブルには、カップが二つ。均等に注ぎ分ける。
私の分と、あの子の分。

芳醇な香りが立ちのぼる。思わず、笑みをこぼす。「……私、ホントはコーヒー党なんよ。紅茶は普段あんまり飲まんし。銘柄の違いだってわからんのじゃから」

見えないあの子に、まるでそこにいるかのように話しかける。気の置けない友人と、与太話でもするように。朝方の、目が覚めるよ

うな寒さが残る窓辺に立ち、私はそっと紅茶を啜った。冷たい風が、肌に心地よい。

「あっち……っ……！」

私は猫舌だ。熱い飲み物は元来あまり得意ではなく、コーヒーだってアイスコーヒーしか飲まない。熱い紅茶を飲むようになったのは一緒に住んでいる『ルームメイト』のあの子の影響だ。最も、彼女は香りを楽しむだけだが。

「この紅茶、とっても美味しいわ。今までで一番、上手く入れられたんじゃねーかな？　ねぇ……そう思わん？」　紅茶の香りはまだ強く立ち込めている。

アールグレイに似ているけれど、それとは少し違った、爽やかさと無邪気さがブレンドされた香りが。

ちらり、とテーブルを見やる。カップの中の紅茶はまだユラユラと湯気を立てている。

私とあの子が出会ったのは、この部屋だ。いや、あの子の方が先客だったのだから『あの子と私』と言うべきかもしれない。

半年前、私はこの部屋に越してきたのだ。大学生になり、念願のひとり暮らしが出来ると、私は有頂天だった。

ところが、そろそろひとり暮らしにも慣れようかというときだ。私はおかしな事に気がついた。時々、物の配置が変わっていたり、きちんと整頓していた筈の本が床に落ちていたり……。逆に気味が悪いくらいキッチリと片付けられていたこともある。そして、私が異変に気づいた直後に必ず『音』がするのだ。

シュル……シュル……シュル……

着物の帯でも解くような、長い裾を引きずるような音が。

おかしいとは思ったが、怖くはなかった。元々幽霊の類いなどは信じない方ではあるし、私の勘違いかもしれないと思い込もうとしている気持ちも少なからずあったのだろう。

その後も何事も無いような顔で、その部屋で過ごし続けた。

「あんたさー、よくあのアパート、ガマンして住んどるよね。前から何か出るって噂あったし」

だから、安かったのか。私は納得し、友人の亜矢に言った。

「怖いものじゃないっぽいけぇ……物、動かされたりする程度じゃけん」

「ポルターガイストってやつ?」

私は首を振り、本が散らばっている程度だと言った。そして、気づいた直後に必ず布を引きずるような音がするということも。

「それ、シルキーやない?」

聞き慣れない言葉に私は戸惑った。そういえば亜矢はオカルトマニアだったっけ。

「イギリスの妖精だか幽霊だかでね。古い屋敷にいて、部屋を片付けたり、逆に散らかしたりするんだって。でね、そいつが出るときは必ず『衣擦れ』の音がするんだってさ」
「衣擦れ？」「うん、シルキーの着てる絹のドレスが擦れる音なんだって。だけど、あんた本当に何にもないん？」

「ないよ。なんで？」
「シルキーって、自分が気にいらん奴は追い出すっていうし」

亜矢は、半分本気で怯えていた。オカルトマニアな癖に『超』が付くほど怖がりだ。まだ『シルキー』と決まったわけじゃないのに。第一、イギリスの妖精が日本のアパートにいるわけない。
私は、笑った。

「鉄の心臓やね、あんたは……あ、忘れてた。ハイ、これあげる」
亜矢は鞄から外国のものらしい紅茶を取り出した。

「……なあ、これ封が開いとるんやけど」
「姉ちゃんが海外旅行行ってさー、お土産もらったんだけど……あたし、こういうオレンジ系の匂いダメでさー。もらってくんない？捨てるの悪いし」

つまりは、お土産の横流しか。柑橘系の香りがする紅茶だ。

「オレンジがダメって、亜矢って猫みたい。これ、アールグレイ？」

紅茶で柑橘系の香りといえば、アールグレイだろう。これしか知らない。

「ううん、バイカルって名前」

湖みたいな名前だ。アイスティーにしても美味しいというので、亜矢の姉さんにはちょっぴり申し訳なく思いつつも、ありがたくいただくことにした。

家に帰り、早速紅茶をいれてみる。

爽やかな香りが漂う。

「あー……いい香り。亜矢、こんなのダメなんだ」

氷をたっぷり入れたグラスに注ぎ、いざ飲もうとしたときだった。

シュル、シュル……

あの音だ。すぐ近くで聞こえる。私はグラスを置いた。

「あれ？　……止まった」気のせいか、とグラスを持つとまた、

シュル……シュル……

聞こえる。グラスを持った手が、一瞬ピリリと痙攣した。

「もしかして……」

私は戸棚からカップを一つ出した。『彼女』の為に。

まだ熱い紅茶をたっぷりと注ぐ。

「これ、あなたのよ」

と、言葉を添えて。柔らかな衣擦れの音が、優しく響いた。

その日以来、彼女は以前よりも頻繁に現れるようになった。もちろん、姿は見えない。ただ、私が化粧をしたり、ファッション誌を読んだりしているとき、そして香りの強い紅茶をいれるときに彼女

の衣擦れの音が聞こえ、時には視線まで感じるようになった。
慣れてみると、そんなにおかしな事ではないように思えた。姿は見えないし、声を聞くことも出来ないけれど、そばにいる。ここに確かに存在している。
気付けば、食事も二人分作って並べている私がいた。食べないとわかっているけれど。この、姿の見えないルームメイトに合わせて、熱い紅茶を添えて……。いつしか、紅茶をいれる事が日課になった。

「封が開いとるもん。早く飲まんと、もったいないしね」

素直になれない独り言を呟きながら。熱い紅茶も、飲み慣れれば美味しい。

「あなた、亜矢の言う通り『シルキー』なん？　……いや、もう、どうでもいいや」

飲み終えたカップを手に、私は窓辺で笑う。なんだか、彼女が現れてから穏やかな気持ちになれたようだ。
彼女が何なのか、結局まだわからない。
今のところハッキリわかっているのは、彼女と私は、割と仲がよいルームメイトだということだ。

「美味しかった。今度は、ダージリンにしよっか？　それともセイロン？」

爽やかで無邪気な香りの余韻に浸りながら、きっとそこにいるであろう彼女に呼びかけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8348s/

バイカルを窓辺で

2011年10月8日19時52分発行